



サカタのタネ

PASSION in Seed

<企業情報>

株式会社サカタのタネ
〒224-0041
神奈川県横浜市都筑区
仲町台2-7-1

<事業内容>

花と野菜の品種開発、
種子・苗の生産および販売、
園芸資材の販売。



情報システム部
主席
嶺澤健一氏



情報システム部
鷺澤柚香氏

Denodoによるデータ仮想化でシステムの内製化を加速 サイロ化しがちなデータの相互利用を促進

株式会社サカタのタネでは、「ワンファクト・ワンプレイス」というデータ管理の原則を守りつつ、社内のデータを各システムで利用できる仕組みを仮想化技術で実現するため、Denodoの導入を決定しました。ローコードツールと組み合わせることで、外部ベンダーに頼らない内製化を実現。ユーザーの要望に柔軟に対応できる開発体制を整え、わずか2名という少数精鋭でアプリケーションを開発、提供までのリードタイムも短縮しています。

データ管理の原則を守りながら、社内のデータを一元化して 利用できる環境を整えたい

1913年の創業以来、革新的な品種開発で世界をリードしてきた株式会社サカタのタネ（以下、サカタのタネ）。同社が品種改良したプロッコリーは、世界シェア約65%のトップシェアを誇ります。また花の分野では、北米原産のトルコギキョウを品種改良し、新たな市場を開拓してきました。

サカタのタネでは、既存の資産を大切に、長く使い続ける文化が根付いており、システムについても同様に、一度導入したシステムを長期間活用してきました。

「製品の老朽化やメーカーのサポート終了により、新旧のシステム間での接続に課題が生じていました。また、社内で使うシステムの多くを内製化していますが、そうしたシステムでデータを利活用する際にも、データ変換が必要になるなど、システム設計や開発作業において、データの存在場所や格納されているデータの質が障壁となっていました」（情報システム部 主席 嶺澤健一氏）

「ユーザーにとって最も重要なのは、正確な情報がタイムリーに提供されることですが、システム間のデータ連携が難しく、実現できていませんでした。Denodo 導入前のアーキテクチャでは、この要求に十分応えられていませんでした」（情報システム部 鷺澤柚香氏）

特に課題となっていたのが、同社が活用するローコードのWebアプリケーション開発ツール「OutSystems」と、既存データソースの接続です。

「直接接続することが不可能なデータソースも存在し、その場合はOutSystemsを用いたアプリケーションの開発は不可能でした。Denodoを導入することにより、OutSystemsと様々なデータソースとの接続が可能になり、今後においても、他のシステムのデータを活用したいとなったときの可用性・拡張性の向上やデータ変換の必要性も考慮すると、Denodoを中心とするデータハブが必要だと強く感じていました」（嶺澤氏）

また、データ活用で利用しているBIツールにおいても、接続に課題が生じていました。システム間をつなぐアダプターのサポートが切れ、接続ができなくなっていました。

システムに部分的な変更があってもサービスを継続的に運用でき、また複数のデータソースや異なる形式のデータを統一された方法で利用できる、そうしたハブとなるデータレイヤーの必要性が高まっていました。

ロジカルデータウェアハウスを支える基盤としてDenodoを選定 内製化を加速

嶺澤氏は、データ管理の基本原則として、「ワンファクト・ワンプレイス」を挙げます。

「物理的にデータが複製されると、どれが最新なのか分からなくなったり、誤って古いデータが利用されたりするリスクが生じます。従って、データの信頼性を保つには、ひとつのデータが複数のリポジトリを持たないこと、すなわち『ワンファクト・ワンプレイス』が重要です」（嶺澤氏）
物理的なデータの複製を行わず、複数のシステムで同じデータを利用できる仕組みはないか。そうした検討の中で、着目された技術が「仮想化」でした。

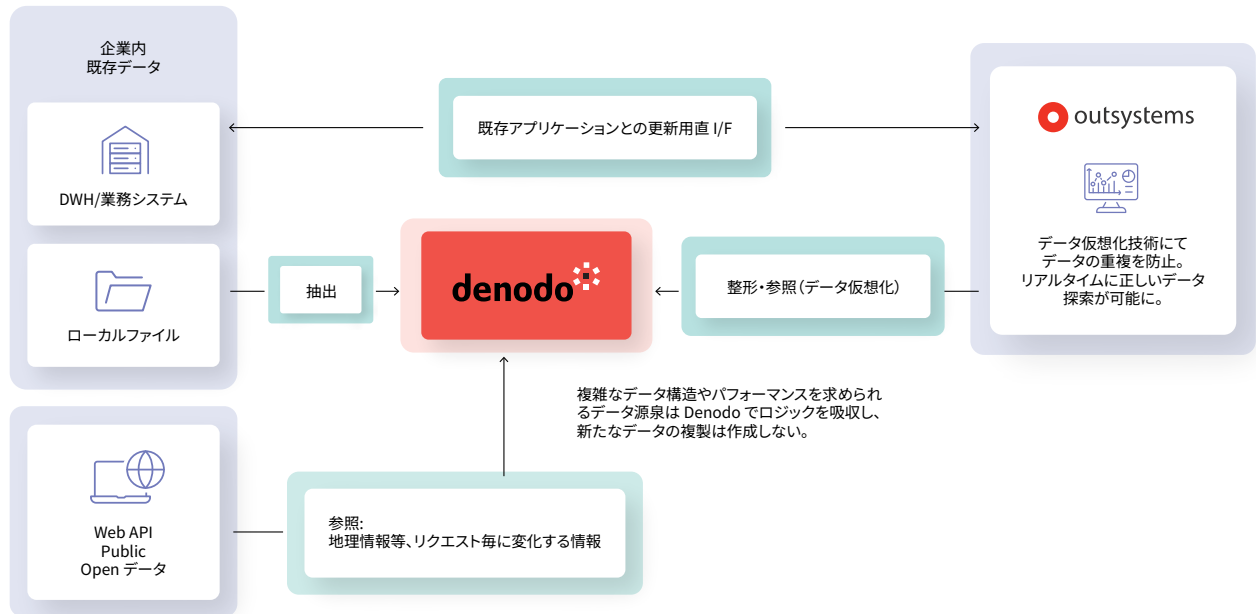
「データの信頼性を担保しつつ、各システムやアプリケーションから利用しやすいデータハブを、仮想化技術で実現したいと考えて、ソリューションを探していました」（嶺澤氏）

検討を進める中、2021年頃、Denodoとの出会いがありました。

「当時はまだ、仮想化によるロジカルデータウェアハウス製品は珍しかったのですが、ユーザーの利益になると考え、すぐに導入を決めました。データ活用において、ユーザーにとって最も重要なのは、タイムリーに正確な情報が得られることです。Denodoを導入することで、この要求に応えられると考えました」（嶺澤氏）

Denodoを導入後、サカタのタネでは、各システムに蓄積されたデータを相互に利用できる環境を整備。それらのデータを利用して、社内に必要なアプリケーションを、ローコードツールで開発できる環境も構築しました。

システム構成



パフォーマンス100倍向上、システム変更への柔軟な対応を実現

現在、サカタのタネでは、数十におよぶアプリケーションを、情報システム部内の担当者2名で開発、運用しています。

Denodoの導入により、ユーザーがほしい形式でデータを取得できるようになりました。これまで活用できていなかったデータが、Denodoを通じて活用できるようになっています。

「一例を挙げると、WebサービスのAPIを通じて得られるデータを、ユーザーが利用しやすい表形式に変換しています。Denodoがなかったらできなかったことです」(嶺澤氏)

またDenodoのキャッシュの活用によって、処理速度が約100倍に向上。数百万件のデータも数秒で処理できるようになり、レスポンスが大幅に改善されました。

「これらの機能は、Denodoなしでは実現できませんでした。ユーザーから要望があっても、データを出すことも活用することもできなかったでしょう」(嶺澤氏)

データベースのバージョンアップへの対応も、大幅に品質および工数が改善されました。

「この作業は本来ならさまざまな作業が必要なところですが、Denodoを使うことで、データソースの変更のみで対応できています。今後もなんらかの理由で、大本のデータが変わることがあっても、Denodoの高い可用性で、対応できると考えています」(嶺澤氏)

サカタのタネでは、SaaS形態のERPパッケージソフトを利用していますが、その連携においても、Denodoが重要な役割を果たしています。

「ERPパッケージソフトのデータは、そのままでは他のアプリケーションやBIツールでの活用がしにくいのですが、Denodoを介してデータの整形やクレンジングすることで、ユーザーが利用しやすい形のデータとして提供できています」(嶺澤氏)

データカタログの利用拡大に加え、AIとの連携による自然言語でのデータ検索も視野に

サカタのタネでは、ユーザー自身によるデータ利活用を進めるため、Denodoのデータカタログをユーザーに開放することも検討しています。

「データカタログをユーザーに開放することで、IT部門に依頼しなくても、ユーザーが自分で必要なデータを得られるようになります。すぐに誰でも利用できるわけではありませんが、IT部門の工数削減も期待できるので、進めていきたいです」(嶺澤氏)

ユーザー自身によるデータカタログの利用においては、AIの活用も可能性を広げる鍵になると、嶺澤氏は話します。

「自然言語での検索に対応できる環境の構築を目指しています。データカタログにLLM(大規模言語モデル)を組み合わせることで、自然言語でのデータ取得が可能になります。例えば『ある顧客の今年の売上高と、類似する顧客の情報を比較したい』といった問い合わせに対応できるようになれば、データ利用の価値がさらに向上すると思います。」(嶺澤氏)

「ワンファクト・ワンプレイスの原則を守りながら、データを利用できる基盤を構築したサカタのタネのデータ利活用を、これからもDenodoが支えていきます。」



denodo